



三位一体

レンゴ―社長 大坪 清

2013年、癸巳の年がスタートした。新しい年、新政権の強力なリーダーシップで、あらゆる面での再生を期待したい。

いま子どもたちの間で「ダンボール戦機」というテレビ漫画がはやっていることはご存じだろうか。その主題歌のタイトルが「三位一体」と聞いて驚いた。三位一体と言えば、キリスト教の教義としても知られるが、00年、私がレンゴ―の社長に就任した直後、当時混乱を極めていた古紙・製紙・段ボールの3つの業界の聖域なき構造改革として提唱したのが、まさに「三位一体」だったのである。

なぜ三位一体なのか。100%リサイクル可能で循環型の、環境に優しい段ボールは、わが国においては非常に高いリサイクル率を誇り、実際、11年のリサイクル率は96.2%にも上る。これは段ボールが生産工場からユーザーへ届けられ、輸送の用に供される動脈物流だけでなく、回収されて、再び製紙原料として

て利用されるまでの静脈物流が完備されているということだ。

このリサイクルの輪こそが段ボールにとっての生命線であり、価値の源である。結局、この輪を構成する古紙・製紙・段ボールは運命共同体の関係にあり、いずれが欠けても段ボール産業は成り立たない。中でもその原点は、街中で毎日額に汗して働く古紙回収に携わる人たちだ。

彼らの生活が成り立たないということは、すなわち段ボール産業が成り立たないということになる。私が三位一体と称し、3業界が手を携えて、お互いの利益を考えながら、さまざまな改革に取り組みべしと言いつづけている原点もまさにここにある。

かつてこの3つの業界は、お互いに損を押し付け合うことが多かった。古紙は発生物であり、計画的な生産ができない。わずかに余っても価格は暴落の危機に瀕し、逆もまた然りである。その在庫管理、価格政策には細心の注意が必要であり、製紙業界、

段ボール業界だけの利益を考えて行動しては、世界の模範といわれるわが国のリサイクルシステムを崩壊させてしまうことになりかねない。

世界的な景気後退と不安定な日中関係もあり、古紙の国際価格は非常に微妙な状況にある。新政権には大いに期待しているが、財政的に危機に瀕する政治に多くのサポートは望めない。そうであるからこそ、民の役割、責務は極めて大きい。公益的な視点からも、段ボールリサイクルの輪と、そこで働く人びとの雇用と生活を何としても守っていかねばならない。目先の利益だけを考え、信頼という大切な絆を断ち切るようなことがあっては決してならない。

漫画では三位一体は、心・技・体と、過去・現在・未来と歌われている。その心意気や良し。本家の肝心の段ボールにとつても、その肝心の大きな命題が、まさしく古紙・製紙・段ボールの三位一体の信頼関係なのである。

本連載は、大坪清、海江田万里、北川正恭、茂木友三郎、清田瞭、平沼越夫の各氏が担当します